

# 総社市の災害史

## — 災害を語り継ぎ、教訓とする —

「天災は忘れたころにやって来る。」この言葉は、自然災害は以前の被害を忘れたころに再び起こるもの。何事も日頃から油断することなく備えておかなければいけないとの戒めです。**過去に起きた災害を未来へ語り継ぐこと、これも大切な防災です。**以下に明治時代以降で市内に大きな被害を及ぼした水害・土砂災害を掲げています。

年 月	主 な 被 害 状 況
1893年(明治26年)10月 (高梁川流域最大級の被害)	11日未明から降雨が続き、特に13日夜半から台風接近に伴い暴風雨となる。雨量のピークは14日正午前後。日美村、湛井堰下流(六本木)、池田村、清音村、三須村(十二ヶ郷用水)、秦村、神在村、川辺村など高梁川流域の多くの箇所ですべて堤防が決壊し、甚大な被害が発生した。特に、湛井堰下流左岸堤防の決壊では、影響は吉備津付近まで及び、井堰近郊だけで死者160人。この水害を契機に高梁川の堤防工事を計画、明治40年工事着手、大正14年に現在の堤防が築かれた。(総社市史、昭和町史、常盤村史、清音村史等から)
1934年(昭和9年)9月 (室戸台風)	9月20日から21日にかけて「室戸台風」が襲来し、県下の3大河川は氾濫して高梁川では特に中上流部で激甚な被害が発生した。富山村では県道(現国道)崩落、水内橋流出などの被害が出た。県下の死者145人、住家全壊4,696戸など(岡山県:昭和9年風水害史から)
1972年(昭和47年)6、7月 (通称47災害)	7月9日から13日の累計雨量は291.5ミリ、日最大116.5ミリ(13日)、1時間最大25ミリ。重傷2人、軽傷2人、全壊2棟、半壊2棟、床上浸水68戸、床下浸水150戸。(6、7月合計)秦で土砂災害。草田の堤防決壊、床上浸水約50戸。阿曾久米田川決壊等小河川氾濫。湛井合同堰下流部左岸大規模な洗掘、避難指示を一時検討。真備町小田川決壊。
1976年(昭和51年)9月	台風17号と前線により県南部で豪雨。 市内では、8日から14日の累計雨量約450ミリ。小河川が各所で氾濫した。負傷者2人、半壊7棟、床上浸水102戸、床下浸水572戸。真備町小田川決壊。
2013年(平成25年)9月	台風17号及び前線による豪雨 日羽で大規模な土石流が発生。1棟全壊、1棟半壊。日羽の一部に避難勧告を発令。美袋で4日6時から9時までの3時間で57ミリの雨量を観測。
2018年(平成30年)7月 (西日本豪雨)	台風7号及び前線による豪雨 (県下に大雨特別警報発表) 5日から降り出した雨は、6日深夜にピークを迎え、7日にかけて上流ダムの放流と相まって高梁川の水位が上昇。日羽観測所で最高水位13.12メートル。4日から7日までの総雨量は298ミリを観測し、草田で堤防決壊、作原で越水など大きな被害となった。特に下原では、アルミ工場の爆発による爆風と小田川の決壊に伴う浸水の二重の甚大な被害となった。死者10人(関連死を含む)、負傷者38人、住家被害は全壊84棟、半壊544棟、倉敷市真備町小田川及び支流決壊。全市に初の避難指示(緊急)を発令。



「流れ地蔵」(左が流れ地蔵)

天明元年(1781年)新本川の大洪水による死者19人を供養するために建立(新本池田)



「出水点基石」

明治26年の水害時の水位到達位置を記録したもの(井尻野山の端)



「水害犠牲者供養塔」

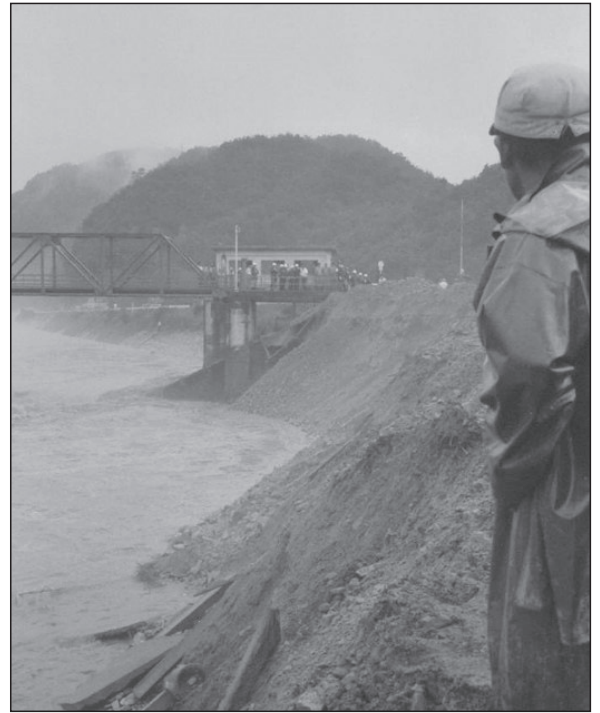
明治26年の水害時に亡くなった多くの人々の霊を供養するために建立(井尻野湛井)



# 記憶に残す！

昭和 47 年 7 月豪雨

湛井合同堰



平成 25 年 9 月台風・前線豪雨



日羽・大規模土石流





# 未曾有の大災害

(平成 30 年 7 月豪雨の爪痕)



- ① 作原
- ② 草田
- ③ 日羽・草田
- ④ 富原
- ⑤ 下原 爆発した  
アルミ工場

提供：岡山県消防  
防災航空隊





# 支援の輪

— その1 —



市役所前に集結した、高校生ら約1000人のボランティア



災害廃棄物の撤去



下原公会堂に集合したボランティア



被災家屋での撤去作業



フリーマーケット方式による被災者支援



# 支援の輪

— その2 —



## 豪雨災害の人的被害

R2.2 現在

死者 10人

負傷者 38人

(死者に関連死を含む)

- ①② 高校生ボランティア
- ③ ボランティアバス (ボラバス) による輸送
- ④⑤ 仮設住宅 (福島県いわき市からの支援)

